

詩を冊子にまとめたものが奉納された。最後に一同起立、敬礼、撃鼓百八響のなかに奏楽と続き、拝観者一同聖廟の堂中に昇り、孔子像を拝観・拝礼して釈菜は終わった。

暫時、休憩の後全員講堂に参集、江戸時代から今日までここに座った生徒たちの手によって拭き込まれた床を守る為、靴下を二枚履いた後に入場し、森先生（岡大名誉教授）による「論語卷之七 憲問第十四」の講釈があった。十本の樗の丸柱のある荘厳な国宝の講堂における論語の朗誦は、まさに至福の一刻であった。

場所を変え敷地内にある教育センターにおいて「分胙」と呼ばれる食事があった。これは釈菜のあとお供え物を皆で食べるという習慣から、今日では別途清潔な食堂で作られた内容のある弁当で赤飯を美味しくいただき、遠来の客ということ、ひとこと挨拶を希望された。

三百年の時を経て、敷地を石塀が世俗から分断し、これにより精神的な結界を築き、学問の聖域と呼ぶに相応しい場所にある国宝建造物が、今なお教育活動の場として活用されているのは極めて珍しく、聴いたことのないことであるが、重要なことであると思った。

儒学・論語の世界観に包まれた閑谷の地は、訪れる人の心を惹きつけてやまない、心に残る秋の一日であった。

自然賛歌

極楽寺山の自然観察（八）

妹尾 治 人

三十五碑を過ぎて間もなく左手に極楽寺歴代住持の墓所があるのでお参りして行こう。墓所の中央の無縁塔には、当山一代本光瑞如不主位・寛政五年癸丑四月九日と刻銘がある。

寛政五年（西暦一七九三年）と刻まれた墓所の



前に二本の高野槇が植えられている。（写真参照）高野槇と言え、秋篠宮・紀子様のご長男、悠仁親王（平成十八年九月六日ご誕生）のお印の木で、この年には、高野槇の苗木が記念樹として沢山植えられた。墓所の前の二本の高野槇は、相当の年数を経て、幹廻り110cmと98cmの大木となっている。ところで高野槇の木肌は松と全く同じで葉をよく見ないと区別が出来ない。

墓所にお参りして参道に引き返すと、すぐ左手



に憩いの森、キャンプ場の標識があり、さらに少し



進むと仁王門（山門）がある。ここは五日市と左方からの登山道との出合い場で三十八丁碑があり、左側に天平三年（西暦七三一年）に開山された極楽寺にまつわる説明版が立てられている。山門を潜ると三基の石地蔵が安置されている。この辺りは極楽寺山の40ヘクタールに及ぶ自然林で赤檜、縦の木が多く、秋には赤檜のドングリがビー玉をころがした様に参道に落ちていた。急な石段を登りつめたところの左側に平良参道最終の三十七丁碑、天明元年（西暦一七八一年）（写真右下参照）があり、右側に五日市観音道からの十三丁碑、天



明四年（西暦一七八四年）が立てられている。

極楽寺本堂には、県の重要文化財に指定されており、十一面観音（別名涙流しの観音）が祭られている。

阿弥陀堂には木造（材質ヒメコマツ）としては、日本一と言われていた阿弥陀如来が安置されている。

境内には日本百選に指定された赤檜があり、千年杉にはムササビの巣穴が見られる。秋には紅葉が一幅の絵のように色鮮やかにお寺を飾る。お寺の境内は、バードウォッチングのメッカでもあり、渡り鳥のハチクマの観察にカメラマンが多数集まる。またヤマガラ、シジュウガラが登山者の手から餌をもらっているのを見かけたことがある。

極楽寺山の自然観察シリーズは、お菊地蔵から始まって、平良参道の石碑を確認しながら三十七丁碑までゆっくり観察させてもらって、今回で終了となるが、三十七本の石碑のうち行方不明のものが十五本、何とか復元したいものである。

おわりに、瀬戸内海国立公園に指定されている

極楽寺山は、自然が豊かな山で五五三種の植生が確認されており、四季を通じて見どころ一杯でお寺に参り、蛇の池を中心とした憩の森の自然探勝路を歩き、桜の里を経てアルカディアビレッジで汗を流した。これは心と体の健康に最高の憩の場所であった。また標高六九三mの極楽寺山は、廿日市市民の水資源であることも忘れてはならない。

（自然観察指導員）

会報『さくらお』第134号

平成25年1月31日 発行

廿日市市郷土文化研究会

〒738 - 0014

廿日市市住吉2-2-16

廿日市市市民活動センター内

印刷 シゲモト印刷